

2025 年度

国府台女子学院 中学部

第 1 回入試

国 語 (50 分)

**【注 意】**

1. この問題は、「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
2. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
3. 印刷が不鮮明ふせんめいでわからない場合や、その他わからないことがあった場合には、  
だまって手をあげ、先生にたずねてください。
4. 答えは、すべて解答用紙に記入してください。



問六 次の空欄に入る言葉として最も適当なものを次のア～カから一つ選び、記号で答えなさい。

【 】 まちがいではない。

- ア あたかも                      イ あながち                      ウ いささか  
エ おもむろに                      オ つくづく                      カ とりわけ

問七 次の——線部の敬語の使い方が正しければ○、まちがっていれば正しい敬語を答えなさい。

ご不明な点があればもうしあげてください。

問八 矢印の方向に読んで熟語になるように、空欄に入る漢字一字を答えなさい。

越 ↓ □ → 目  
辺 →

問九 二〇二三年五月十五日の「信濃毎日新聞 デジタル」に次のような記事が載っていました。

「『天才』『末恐ろしいセンス』賞賛コメント相次ぐ 小学生の防犯ポスター Twitter (現X) で17.9万いいね」

塩尻市内の小学生が描いた防犯ポスターを撮影したSNSの投稿が拡散

され、大きな話題となっている。2022年度の長野県警の防犯ポスターコンクールで銀賞を受賞。作者の小学生は22年12月、コンクール表彰式で「個人的にもよくできた」と笑顔を見せていた。

### ※著作権処理中です

このポスターの□に入る最も適当な鳥の名前をカタカナで書きなさい。

問十 次の——線部が「二世一代」の「世」と同じ読み方のものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 世紀                      イ 世相                      ウ 永世                      エ 常世

問十一 「はなはだ」という言葉を使って二十字以上三十文字以内で短文を作りなさい。話を通じれば主語がなくてもかまいません。

〔三〕 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

若い母親に手をひかれて電車に乗りこんできた二、三歳ぐらいの男の子が、乗客に座席をすこしあけてもらって一人だけ腰をかけ、母親の手で靴を脱がされた。母親は傍に腰かけられず吊り手につかまって前に立っている。それが男の子にとってはフフクのようにであった。まもなく、男の子はむずかりはじめ、母親の持っている乗車券をねだった。母親は困ったような顔をしたが、傍の乗客に気兼ねをして、乗車券を子供に握らせた。子供は、しかしそれだけで満足せず、母親の手提バッグに入っているらしい菓子をねだり出した。母親はバッグから紙袋をとり出し、中からビスケットふうなものを二つ三つ子供に握らせて、紙袋をバッグに戻した。子供は、それが気に入らないと言って手足をばたばたさせてぐずった。母親は苦笑して菓子を紙袋ごと与えた。子供は上目づかいに母親を見ながら菓子を食べ、すこしの間じつとしていたが、なんと今度は母親のイアリングをよこせとむずかり出した。① 近くの乗客が失笑した。ところが母親はすぐにイアリングの片方を耳からはずして子供に握らせ、子供を黙らせた。少し離れたところでこの様子を見ていた私は、なぜか不意に涙ぐんだ。② そして、それでいいのだと思った。

しかし、「それでいいのだ」と思った私の気持は、普段の私の気持を裏切るものであった。いつもの私は、人中で子供を叱ることのできない母親を見ると、いらいらして不快になるほうなのである。それが、どうしてそのとき、叱らない母親の姿に心を動かされたのだろうか。

他の乗客の迷惑を考えたとは言え、ほとんど子供の言いなりになっていた若い母親の処置を適切だったと思っただけではない。その点では、むしろだらしのない母親だと私は思ったし、子供の躾け方という点では、なっていないと思ったのだが、その「子供の躾」に欠けていた母親が実は、躾以上に大

切な或る受容力を持っているらしいことに、心を動かされていたのだ。

③ 躾というのは、ごく簡単にいうと、社会人の一人として落伍せずに生きて

ゆくためのマナーである。多少、小むずかしきいうと、社会の暗黙の掟である。その掟を守ることでできない人間は社会人として失格するほかない。そのために、両親は子供を躾けるわけである。言い替えると躾は、社会の掟に馴れない小さな野性——つまり子供を適応させるための方向づけと言えり。

子供を躾けることができるということは別の面から見ると、子供の生命が極めて可塑性に富んでいることでもある。つまり、住みついた環境次第でどのような育つということである。狼少年とか猿に育てられた子供の話を思い出せば、そのことはわかっていただけよう。狼に育てられた少年を人間の社会に馴れさせるのは大変な苦労だという。

話題が少々脱線するが、狼や猿の間で育った人間と、人間社会に育った人間と、どちらが幸福かという、にわかには断定しがたい。人が狼や猿の間で育つより人の間で育つほうが自然だということはあるだろうが、狼や猿と一緒に生きることが不幸だとは言いがたい。生命にとつての幸福は、生命が周囲と調和を保ちながら、生命であることを全うすればいいわけである。原始人に近い状態で生きようと、ビルの中で暮らそうと、幸福の値打ちにちがいはない。文明のほうが便利だからいいと思つてゐるのは文明人だけのことであり、文明社会が自然と調和を保っているかという、そろそろあやしい雲行きになつてゐるのが人間の今日の姿である。にもかかわらず、便利という特権を捨ててまで原始帰りというか自然人復帰というか、そういうことのできなくなつたのが人間であり、自然な本能や調和を追い出してしまったのが人間だといえる。そして私たち人間社会での、子供に対する躾は、私たちの住んでいる社会を最もいい所だと信じてそこに馴れさせる訓練だといえる。そこで、躾ということ、躾けられる子供のほうから眺めてみる。この世

に人の子として生まれてきた生命は、本質的に言えば、狼や猿と同じ野性であるが、その野性から最も遠いところまできた文明人の作法に急速に馴れさせられるのが躰だということができないだろうか。

躰を受けている間に、野性が文明人へと磨きをかけられているといえれば聞えは良いが、その過程で受けるのはかなり強烈な精神的なユガミではないだろうか。多少しつこく言えば、ユガミとも気付かぬようなユガミなのではあるまいか。

親が子供に期待するのは、世間的なマナーや能力に早くなじむことであつて、もしそれが親の目から見て不足だったり不十分だったりするときは、子供に対する督励が始まる。そしてその督励にうまく応じることができない場合、子供は親の期待を裏切つているという精神的ユガミを背負うことになる。

このへんに、躰乃至教育というもののものつ A がある。まして今日の競争社会では、躰とか教育は人を社会の落伍者にしないためのものというよりは、むしろ、他の人を出しぬくためのものとなり、それが小さな者たちに振りかかっているといえる。

固い話で、申しわけないが、少し辛抱してほしい。

作家の曾野綾子さんが、もう大分前、朝日新聞の「台所のスキヤット」という連載エッセイの中で、「なぜ絶望を教えないか」という文章を書かれたことがある。(昭47・3・26付)

このエッセイは、例の「あさま山荘事件」のあと、一、二のマスコミから印象を聞かれたときに、日本の教育が今失つているものは人間の持つている本質的な矛盾に深く絶望する勇氣だという意味の発言であった。

曾野さんはこんなふう述べておられる。

「一般的な言い方をすれば、私は青年たちのご両親が教育不熱心だったなどとは決して思っていないのである。そのほとんど全員が能力もあり、社会的

にも立派な活躍をされており、子供に優しい(時には厳しい)いわゆる良識ある親御さんだったろうことは疑わないのである。ただ一つだけ、もしかするとこのような親たちに限つてされなかったのではないかということを、私は考えていたのだった。

この親御さんたちは子供たちに、根も葉もある『絶望』を幼いうちから教えられただろうか。社会も人間も、共に根底にあるのはとめどのない矛盾であり、その絶望的な部分をセイシすることによって初めて実質のある希望が生れて来るように、私は思うのである。絶望の裏づけのない希望などというものを、私は信じられない。

親たちの教育よりも、しかし大きな責任を持たねばならないのは戦後の『民主教育』であった。その実体的ない、希望に浮かれた熱病のような明るさは、いい面もあるが、人間を犯す部分を持つていたように思う。

みんないい子。誰もが同じ。これは希望を述べた言葉である。しかし現実をあらわしてはいない。そうあるべき姿として『みんないい子であり誰もが同じ』であることを望むだけなのである。むしろこの言葉が生まれたのは現実が決してそのように理想的でないからであった。『世の中、マチガツトル』という流行語を使うと楽しいが『まちがつと』らなかつた世の中など、いつの時代にあつたらう。

——中略—— 私たちはまず深く絶望していいのではないだろうか。民主主義などというものも、決して輝ける理念ではなく、人間の即物的エゴとエゴとを、いかに共存させて行くかということについての、苦肉の策であつたと思う。人間は誰もが多かれ少なかれ、昏くあやしげで、卑怯である。そのような人間が作る社会もまた、当然不備である。それでもなお、というか、それこそが、私が属することを許され、強制されている社会なのである。」

このように述べたあとで、「これが完全と言い得る社会など決定できない

ことが、(現実の問題として) 確認できていたならば、彼らは果してあのよ  
うな過激な行動に出たろうか」と言い、「もしも彼らの回りに、現世でいい  
と評価されていることに疑いをもち、挫折をも一つ確固とした生涯だと思  
うような柔軟な生き方を身をもってしている人がいれば彼らも深い絶望のふち  
から眼をあげて悲しみにみちて、空を仰ぐこともできた筈である。彼らに、  
本当に絶望すること——絶望してはいけないことを——さえ  
教えられなかった私たち大人の責任は大きい。」と結んでいる。

これは、深い人間理解に根ざした教育理念ではあるまいか。現在の学校教  
育は、先にもふれたように、いかに他の人を出しぬいて社会的に上位のラン  
クに食いこむかというサンダンであって、それを根本的に批評できるだけの  
思想を欠いている。そこが現在の大人の病気なのであって、本当に恥ずかし  
いことと言うべきだろう。

考えてみるまでもなく、人間はエゴの固まりなのであり、完璧さなどには、  
およそ縁のない欠陥だらけの生物なのである。そこを抜きにして躰とか教育  
が進められてゆくとき、傷つかぬ者がいるだろうか。

私は、この小文の初めのあたりで、子供を叱らない母親を見るといらいら  
し、不快になると書いた。そのくせ、たまたま見かけた、叱らない母親に対  
して、それでいいと感じた。私の心の中で何が動揺したのだろうか。多分、  
躰のもっている功利性——つまり、子供を社会の適性にはめこもうとする訓  
練の無意識な体系、そういうもののAにうすうす気付いていたことと、  
もう一つ、その功利性によって子供をそこなわないためには、母親から子供  
に向けての無条件受容、全面肯定が必要であること、そして、それが幼時期  
にとりわけ不可欠であるらしいことに、私が思い至ったためかも知れない。  
そのきっかけを与えてくれたのが、その時の若い母親であった。

大人になって、自分の欠点だらけな実質に気付いたあとで、人に批評され

否定されても耐えることは比較的たやすい。しかし、幼時期の「くらげなす  
漂える」ころに、たとえば一番身近な母親に、嘲笑されたり、にべもない否  
定を受けたりすることは、ひどく怖いことなのではないか。叱ることが、  
行為の末梢にではなく、子供の存在全体に刺さった場合は、自分を肯定する  
ゆとりをも子供に失わせてしまうのではないか。

私の考えだが、人間というものは救いたいものであればあるほど、そのま  
まそっくりを何者かによって肯定され愛されることが必要なのではないか。仕  
様がないう欠陥だらけのままを愛されてこそ、人は、その欠陥に耐え、同時に他  
の人の欠点に対しても寛容になることができるのではあるまいか。それは、す  
べてが判ってしまった大人同士では純粹な意味では不可能であり、それが可能  
なのは、身二つになってからしばらくの間の母と子だけなのではないか。その  
時期の、子に対する母の盲愛は、子供にとって本当に深く必要なのではないか。  
電車の中で、子供を叱らない若い母親を見て「それでいい」と思ったこと  
を、敢えて説明すれば、そういうことになる。もちろん、それは後で考えて  
整理できたことであって、はじめはよく判らなかつた。

そのことを私は、はじめ、電車中での実景として書いてみたが、構想を変  
え、母子像を「一枚の絵」の中に収めることにした。そしてそれを一度、4  
月14日と15日にまとめ『民主文学』の6月号(78年)に発表した。のち、  
11月の3日と4日の両日にわたって改め次のような詩になった。

### 一枚の絵

一枚の絵がある

縦長の画面の下の部分で

仰向けに寝ころんだ二、三歳の童児が  
手足をばたつかせ、泣きわめいている  
上から

若い母親のほほえみが

泣く子を見下ろしている

泣いてはいるが、子供は

⑧ 母親の微笑を

陽差しのように

小さな全身で感じている

### 「母子像」

誰の手に成るものか不明

人間を見守っている運命のごときものが

最も心和んだときの手すさびに

ふと、描いたものであろうか

人は多分救いようのない生きもので

その生涯は

赦すことも赦されることも

ともにふさわしくないのに

B

そして、母親は

ほとんど気付かずに

⑨ 神の代りをつとめている

※12 ⑨ このような稀有な一時期が

身二つになった母子の間には

⑩ 甘やかな秘密のように

ある

そんなことを思わせる

一枚の絵

### 注釈

(吉野弘『現代詩入門』青土社  
(78・12・11記)

\* 1 落伍：…力量が足りず、仲間からおくれ、ついていけなくなる事。

\* 2 可塑性：…変形しやすい性質。

\* 3 督励：…監督し、はげます事。

\* 4 「あさま山荘事件」：…一九七二年、ある考えのもとに集まった若者たちが人質をとって「あさま山荘」に立てこもった事件。

\* 5 矛盾：…つじつまが合わない事。

\* 6 即物的：…現実の利害を中心に考える様子。

\* 7 エゴ：…エゴイズム、利己主義。

\* 8 功利性：…利益や幸福につながる事。

\* 9 「くらげなす漂える」：…(くらげが漂うように動きが)一定せず、  
移り変わりやすい事。

\* 10 嘲笑：…対象を軽んじてあざけり笑う事。

\* 11 末梢：…物事のはし。末端。

\* 12 稀有：…非常にまれな様子。

問一 —— 線部 a～c のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 —— 線部①「近くの乗客が失笑した」とありますが、これはどういうことですか。最も適切な説明を次のア～エより一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母親からいろいろな物を次々とねだる男の子の様子があまりにもか  
わいらしくて、周囲の乗客が意識せず笑顔になってしまったということ。

イ 母親の言うことを聞かず、次々と物をねだる幼い男の子の様子が心  
配で、周囲の乗客が困ったような笑みを浮かべたということ。

ウ 男の子から様々な物をねだられ、困りながらも対応してあげている  
母親の態度を、周囲の乗客がほほえましく感じて笑ったということ。

エ 男の子が次々と物をねだる様子と、それをたしなめもせずに受容す  
る母親の態度に、周囲の乗客が半ばあきれて思わず笑ったということ。

問三 —— 線部②「なぜか不意に涙ぐんだ」とありますが、なぜ「涙ぐんだ」  
のでしょうか。次の（ア）（イ）内に、それぞれの指定字数にあっ  
た適切な語を本文中より書きぬいて答えなさい。

母親の、我が子に対する（ア 十字）に（イ 七字）から

問四 —— 線部③「羨しつげというのほ」とありますが、「羨」とはどのようなも  
のだと述べられていますか。適切ではない説明を次のア～エより一つ選  
び、記号で答えなさい。

ア 親が子に功利性を求める社会のあり方を理解させたうえで、世間一

般に通用する能力やマナーを身につけさせようとするもの。

イ 社会でのマナー習得が目的だが、それが十分でない場合は、親が子  
供に厳しく干渉かんしょうしてしまい、子供の心をそこねる可能性があるもの。

ウ 子供に世間で生きていくためのふるまいを教え、子供自身が属する  
環境により良く適応できるように大人が導いていくもの。

エ 子供が現代の競争社会の中で落伍らくごせずに、さらには他人よりも優れ  
ることを期待する親の意識が含まれているもの。

問五 A（二か所ある）に共通してあてはまる語を次のア～エから一つ  
選び、記号で答えなさい。

ア 困難    イ 絶望    ウ 受容    エ 危険

問六 —— 線部④「根も葉もある『絶望』」とありますが、この表現にはど  
のような意図があると考えられますか。最も適切な説明を次のア～エよ  
り一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「事実無根」と同様の意味を持つ慣用表現の語句をあえて一部変え  
ることで、この社会では誰の人生においても決して逃のがれられない絶望  
が確実に存在することを強調して伝えようとする意図。

イ 「全く根拠こんきょがない」という意味を持つ慣用表現の語句をあえて一部  
変えることで、絶望に至るには必ず根拠があり、人生においてはそれ  
を前向きに捉とらえる必要があることを伝えようとする意図。

ウ 「物事は根本が重要だ」という意味を持つ慣用表現の語句をあえて  
一部変え、根本にはなりえない絶望からも、意識次第ではしっかりと  
実を結ぶ希望が育つ可能性があることを伝えようとする意図。

エ 「外面を飾る」と同様の意味を持つ慣用表現の語句をあえて一部変え、絶望という内面的な問題と合わせることで、内面をしつかりと見つめることは外面よりも重要であることを伝えようとする意図。

問七 ——線部⑤「戦後の『民主教育』とありますが、これについての説明として適切ではないものを次のア～エから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間なら誰もが持つ、何かしら卑怯な側面から目を背け、全ての人間が公平で好ましい性質を備えていることを意識づけようとするもの。  
イ 人間に本質的な差はなく、皆が対等であることを理解させながら、実際の個人は不完全であるという自覚を持たせようとするもの。  
ウ 「みんながいい子であり誰もが同じ」ことを望みながら、実際にはそうではない社会で生きることを促されるもの。  
エ 人間のエゴを理解した上で、その不適切な部分や自身の欠点を見つめ、それを個性としてのばすことを目指すもの。

問八 ——線部⑥「深い人間理解に根ざした教育理念」とありますが、これはどのようなものですか。最も適切な説明を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 誰もが対等である社会に絶望などあるはずがないが、ふいに芽生える絶望からこそ学ぶべき事があるものであり、絶望することに絶望してはいけないというもの。  
イ 現代の教育の問題点に気づき、どんなに努力しても他人を出しぬき上位に立つことができない絶望があっても、柔軟に受け入れなければ

ならないというもの。

ウ 公平で、誰もが社会的なマナーを身につけた理想的な社会の実現は絶望的に困難であるが、人々は希望を捨てずに努力を継続させなければならぬというもの。

エ 人間社会は本質的に不完全なのだから絶望することがあるのは当然であり、絶望を覚悟して、それをしなやかに受け止めていかねばならないというもの。

問九 ——線部⑦「そこを抜きにして躰とか教育が進められてゆくと、傷

つかぬ者がいるだろうか。」とありますが、この内容に基づいた具体的な事例として最も適切な内容を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 教師から見た生徒はたいがい不完全な存在であるため、きちんとした行動ができていてもつい心配になって、その様子を細かく点検してしまい、かえって生徒の自尊心を傷つけてしまうことがある。  
イ 親が我が子の成績向上を望むのは、親自身が不完全で自身の学習に対する反省があるからであり、その反省もなのまま、子供に無理な学習を強いることで子供の尊厳を傷つけてしまうことがある。

ウ 親は我が子が優秀で努力すればもつとできるはずだと考えているが、子供には不完全な部分があり、努力しても結果に結びつかないことが多くなれば、子供は自信をなくして傷ついてしまうことがある。

エ 教師は生徒同士のトラブルに対応するとき、どちらの生徒にも不完全な点があったものとして公平に指導するが、自分は間違っていないのだと考えている生徒は、その指導により、さらに傷ついてしまうことがある。

問十 「一枚の絵」詩中の——線部⑧「母親の微笑を 陽差しのように 小さな全身で感じている」とありますが、作者は、母がどのように行動したことよって、子供自身がこのように感じたのとらえたのでしょうか。次の（ ）にあてはまる七字の語を本文中から書きぬいて答えなさい。

母が（ 七字 ）に行動したこと。

問十一 「一枚の絵」詩中の B には、この詩の主題ともいえる内容が書かれています。最も適切な内容を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア この絵の中の子供は 神からの 特別な贈り物だ
- イ この絵の中の母子は 幸福という 特別なヴェールを与えられている
- ウ この絵の中の母子は 隔絶された 二人だけの世界に いる
- エ この絵の中の子供は 母なる人に ありのまま受け入れられている

問十二 「一枚の絵」詩中の——線部⑨「このような稀有な一時期」とあるが、具体的にはどのような時期のことですか。次の（ ）にあてはまる最も適切な二字の語を本文中からぬき出して答えなさい。

母からの（ ）が子どもに注がれる時期

問十三 次のア～オの意見がこの文章（詩も含む）の内容にあてはまっていれば1、あてはまっていなければ2と答えなさい。

ア 現代の文明社会に生きる私たちは幸せとは限らないことがわかった。私たちが生き物として持つ野性的な部分を、教育によって理性的

なものに方向づけることはとてもいいことだけど、人間が自然と共生できなくなっていくのは残念なことだわ。

イ 母親からの愛情はとても重要なんだね。優しくされても、それだけでなく親からの期待や督促が大きいと子どもの負担になって心が歪んでしまうんだ。うまくできない自分を丸ごと愛してくれる母の存在があつてはじめて他者にも寛容になれるんだね。

ウ 作者が実際に電車内を見た、母と子のふれあい、その四角い車両の中で、まるで大きな額縁に見事に収まった「一枚の絵」のように感じられ、人々の注目を集めていた様子を、作者はそのまま言葉に表してこの詩で描こうとしたんだね。

エ ——線部⑩（「一枚の絵」詩中）の「ある」が一行におさめられているのは、母子の甘やかな秘密が確実に「ある」ことを強く訴えたいからで、この詩を朗読するときにはあまりに間を置いたりせずに、快活で大きな声でよみあげるといいと思う。

オ 「一枚の絵」という詩は通常の文章のように書かれた散文詩だね。作者の冷静で客観的な視点がよく表れているし、強い愛で結ばれる母と子の絆はとても神秘的で、単純な理屈ではとらえられない尊さがあることを私たちに教えてくれている。

